

## 茨城県における急性脳炎の病原体検索に関する取り組みと検出状況

○後藤慶子<sup>1)2)</sup>, 梅澤美穂<sup>1)</sup>, 永田紀子<sup>1)</sup>, 梁 明秀<sup>2)</sup>  
茨城県衛生研究所<sup>1)</sup> 横浜市立大学<sup>2)</sup>

【目的】急性脳炎の届出の多くが原因不明となっており、急性脳炎を引き起こす感染症の実態を解明することは重要な課題となっている。本県では独自様式を用いた患者情報の収集及び多項目の病原体検索を積極的に実施している。

【材料と方法】検査依頼があった際は「急性脳炎病歴及び症状等記入用紙」（本県独自様式）を用い、患者情報の収集に努めている。検査法は急性脳炎の原因病原体を一元的に判定可能なリアルタイムPCR法を確立し、導入している。更に、呼吸器症状や胃腸炎症状を呈している場合はそれらに関与する病原体検査も積極的に実施している。検査終了後は、医師から「最終診断名及び転帰」（本県独自様式）の情報提供を受け、検査結果と紐付けを行なっている。

【結果】過去4年間（2015年1月から2018年12月）の検査数は計286例であり、年間を通じて検査依頼があり季節性はなかった。また、病原体が検出された症例は162例（56.6%）であり、3歳未満児がその多くを占めた。なお、病原体が検出された中で急性脳炎と最終診断された症例は68例（42.0%）であった。急性脳炎確定症例における検出病原体は、HHV6, Infl, ARVの順に多く、計16種のウイルスが検出された。更に、1症例は死亡例であり、6症例は中程度または重度の後遺症を残した。

【まとめ】急性脳炎は後遺症が残ることもある重篤な疾病であり、病原体の特定は急性脳炎症例の確定に重要である。今後も引き続き病原体検索を実施し、実態解明及び正確な届出に寄与していきたい。